

「私は、あなたのことを許すことはできない」

テーブルの上で握った手に、力がこもる。  
放った言葉の温度は、思ったよりも冷えていたかもしれない。  
ツバメが、目を伏せた。

「でも……、万能薬が必要な理由はわかったわ」

「……え？」

立ちあがり、ポケットの中の鍵に指を伸ばす。

「待っていて」

キッチンを出ていくルルを、俺は見ていることしかできなかった。

『あなたを許すことはできない』。

『待っていて』。

彼女の言葉ひとつひとつが頭の中を巡る。

俺は彼女を騙<sup>だま</sup>していた。

だから許されないのは、当然のこと。

でも、ルルは——。

「これを」

戻ってきたルルは俺に、薄く光るガラス瓶を差し出す。

「必要なら、受け取って」

ツバメは戸惑っているようだった。  
彼の話を聞いて、薬を渡そうと決めたのは、ほかでもない自分だ。

「正直に話してくれたから。だから、いいの」



彼の指先が、そっと、葉に触れる。

そのとき手のひらに触れた彼の指は、とても、冷えていた。

「早いほうがいいわ。行って」

「……うん」

促され、キッチンを飛び出した。

コートをつかんで、薬屋リーファの扉に手をかけたとき、彼女の表情が浮かんだ。

ゆっくりと、頭を振る。

そして俺は、一歩、踏み出した。